



さぎし
詐騎士 5

かいとーこ
Kaitoko



RB

レジーナ文庫



登場人物
紹介

▼ティタニス▼

ルゼの幼馴染。
彼女のことが好き。

▼レイド

傀儡術の才能を
持つ若き騎士。

▲ゼクセン▲

大商人の息子で、
ルゼの妹の婚約者。

▲ニース▲

ギルネストの親友で
最高の剣士。

▲カリン▲

ルゼの仇の娘だが、
今は友人。

▼セルジウス

医者^{シヤクシ}の免許を持つ
少年神官。

▼ラント▼

ウサギ型の
獣族^{ベヒム}で薬師。

▲ギルネスト

ランネル王国の第四王子。
別名「サディスト」。凄腕の
魔術師で、最近軍の幹部に昇格。

▲ルゼ▲

訳あって身分、年齢を詐称し
聖騎士団に入った少女騎士^{かいらいしゆつ}。
人や物を操る傀儡術が得意。

▲エリネ▲

ある村に住む、ごく普通の
女の子だったが、突然「聖女^{かいらいしゆつ}」
である可能性を示され……？

目次

書き下ろし番外編

伝統と本音

377

詐欺士^{さぎし}
5

7

詐^さ
騎^ぎ
士^し
5

第一話 聖女候補と聖騎士見習い

眼下に広がる豊かな森林は、私の知る中部のそれと、少し春が早いこと以外はさして変わらぬように見える。

その季節の違いのおかげで、身を切るような寒さは南下することに少しずつ和らぎ、私に乗っている竜のキュルキュの機嫌もよくなった。

私は今ぶ厚い騎竜用のコートを着てマフラーもしているが、休憩のため地上に降りて日に当たれば暑いぐらいだ。

わずかに見える芽吹きかけの新緑は柔らかな風に揺れ、小鳥達は水たまりの脇で戯れる。

その上を私とキュルキュが通り過ぎると、その穏やかな光景は喧騒に変わった。私の白い竜の翼は空を切り、長閑な風情を蹴散らしながら、街道沿いの空を進む。

やがて前方にちょうどこちらに向かってくる馬車が見えた。

貴人きじんを乗せる立派な箱馬車。その周囲には護衛ごゑいが五人。御者ぎよしやを合わせて六人か。馬車の中にもいるかもしれない。おそらくあれこそが、私の目当ての馬車だろう。

「なんだかこういうのも楽しいかも」

獲物を狙う山賊さんぞくの気分。いや、空から狙うから空賊か。

「さて」

舌なめずりをして、キュルキュを下降させる。

馬車の前方に着地すると、私は竜騎士用の風防眼鏡を外して御者に視線を向けた。青い制服と腕につけた盾——彼らはこのランネル王国の騎士団の一つ、青盾に所属する騎士だ。私が命ずるまでもなく馬車は止まる。

私は白鎧の騎士団の制服を身につけて、竜に乗っている。白鎧には貴族の子息が多い。そして竜を駆ることを許された竜騎士は、騎士の中でもエリート中のエリートだ。止まらないわけにはいかないだろう。

私は無言のままキュルキュの背から降りて、ゆったりとした足取りで前に出た。

「何用かは存じませんが、任務中につきお話しすることは出来ません。その竜をどけて下さい」

相手側の一人が言う。

彼らはこの任務をどう聞いているのだろうか。エリートに逆らう程度には釘を刺されているのだろうか。

「そちらになくとも、こちらにはあります。中にいるのは女性ではありませんか？」

「お答えいたしかねます」

「中の女性を解放して下さい。私はその方をお迎えに参りました」

そう告げると、御者は顔をしかめ、周囲の護衛達も剣を抜いた。

「誰であろうが引き渡すことは出来ない。引き渡せと言うならば、この道をまっすぐ進んだ街にいるアンデルト家の方と話をつけて下さい」

なるほど。誰であろうと渡せない。どうしてもと言うならその家の者と話をしてこい、と。その何とかという人は、何を考えてこのようなことをしたのか、もしくはさせられたのか。この騎士達に従う義務はないはずだが、権力者からの依頼は断りにくいし、とても意味深な命令だ。下手に渡せないのは当然だろう。

「私は先ほどまでそちらにいました」

試みに曖昧な言葉で揺さぶってみる。

「いたから何だというのだ。我々はアンデルト家の方以外に命令される覚えはない」

面倒な奴らだと思った、その時だった。

「いやっ、離しっ、いやっ」

馬車の中から、若い女性の声と頬を打つような音が聞こえた。

「大人しくしていろ！」

男の怒声が長閑な街道に響いた。

殴ったのだ。女性を、殴ったのだ。

私が睨みつけると、さすがに外にいる騎士達も苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべた。

そうしている間にも女性はなおも抵抗を続けている。

「あんた達、ホントに最っ低！ ホントつくづく最低だと思っわよ。まあ、こんな所に飛ばされるぐらいだから、騎士の中でも底辺なんだろうけどさっ！ 離せ馬鹿っ！」

「守ってもらって行くせに、よくも言えたもんだなあ。何をしたか知らねえが、お上に逆らって偉そうにしてんじゃねえよ」

どうやら、殴った男も随分手を焼いているらしい。中の女性は思ったよりも跳ねっ返りのようだ。元気があって大変よろしい。私は気の強い子はけっこう好きだ。

「貴様ら、嫌がる女性をどこに連れて行くこうと言うんだ」

命令で連れていくとはいえ、怖がらせた上に殴るなど、こいつらはクズ野郎だ。

私はためらいなく剣を抜いた。はっきりとした行動で示さなければ、私がどれほど本気か理解できないだろう。

「自分達の仕事は、この女の護送です。異論があるのなら、上の者を通して下さい」

「この様子を見る限り、それでは遅いだろう。私は国王陛下より、そのお方を丁重にお迎えに上がれとの命を受けている。邪魔立てするならば、逆賊として斬り捨てろぞ」

国王陛下の命令と聞いて、さすがに彼らは怯んだ。騎竜用の竜など王家所有のもの以外はほとんどいないため、説得力があるはずだ。

「お前達、主が誰か履き違えるな。そのお方を、国王陛下がご所望だ」

「何故、こんなどこにでもある田舎娘を国王陛下がご所望なんだ!？」

「お前らごとき木っ端騎士に話すはずがないだろう。第一、女性に向かってそのように失礼なことを」

私はマフラーを外して首元を見やすくし、剣を片手にゆっくりと前に進む。

「白月?」

階級章を見てくれたようだ。騎士の中でも魔術を使える騎士に与えられる『月』の称号。そういった月持ちの騎士は、所属している騎士団の色をとった呼び方をされる。例えば私のような白鎧の騎士であれば、白月と呼ぶ。

「竜騎士じゃないのか」

「竜騎士でなければ竜に乗れないわけではない。竜がいて、私は乗り手として訓練を受けている。それだけだ」

私は渋々道を開ける彼らの間を通り、馬車までたどり着いた。

警戒しながらドアを開くと、十代半ばの金髪の少女が男に捕らえられていた。その頬は赤く腫れ、目も充血し腫れぼったくなっている。そばかすのある鼻も、泣きはらしたのか赤い。貴族の令嬢を見慣れてしまったせいかわ、少し日焼けしているように見えた。

ひどい顔だが、それでも十分すぎるほど可愛らしい女の子だった。南部に住む平民でありながら鮮やかな金髪は、かなり珍しい。

私は馬車に乗り込み、彼女を殴ったであろう男を殴り倒してから、彼女を安心させるように笑みを浮かべた。

「怖かったですよ。もう大丈夫です」

私は殴られて赤くなった彼女の頬に触れて呪文を唱えた。そして淡く光った手で、彼女の頬を包むように撫でる。

「他にどこか痛むところはありませんか?」

「あ、ありません」

彼女は面食らいながらも、そう答えてくれた。よほど驚いたのか、頬が先ほどとは違う意味で赤くなっている。

「私はルゼ・デユサ・オブゼークです。あなた様をお迎えに上がりました。急いでいたので、仲間からお嬢さんの名前を聞いてくるのを忘れてしまいました。お名前を伺ってもよろしいですか？」

彼女はこくりと頷いた。

「あ、あたし、え、エリネ・コトル……です」

恥ずかしそうに名乗る彼女は、この辺りでは少し珍しい髪の色をしているとはいえ、普通に可愛らしい女の子だ。だからこそ騎士達も、彼女の重要性が理解できなかったのだろう。

「エリネ様。いいお名前ですね」

短くてとても覚えやすい。間違えることはないだろう。

「あの、あなたは……」

「それは道々お話しいたします。さあ、外にどうぞ。一度ご自宅までお送りします」
私は彼女の手を取り、明るい馬車の外へと連れ出した。

「——っ」



外に出ると、彼女は眩しそうに目を細めて手を掲げた。

「キユルキユ、おいで」

名を呼ぶと、私の白い竜は軽い足取りで、きゅきゅつと鳴きながらやって来た。

「え、きゅ？ え、何これっ、でかっ!？」

生まれて初めて竜を間近で見たのだから、エリネ様がキユルキユの姿に驚く。竜は立派な軍馬よりも大きいので、小さい方なんですよ

「この子は雌メでまだ若いので、小さい方なんですよ」

「こ、これで小さい!？」

エリネ様は大きな目をまん丸く見開いてキユルキユを見上げた。

「高い所は苦手ですか？ それでしたら、少し時間がかかりますが地上を走らせます」

「えっ、の、乗っていいんですか!？」

彼女は戸惑って私を見た。まあ当然だろう。しかし徒歩では日が暮れてしまう。

「この子はキユルキユです。とてもいい子ですよ」

寄ってきたキユルキユの首筋を撫なで、ご褒美用の干し肉を与えた。

「エリネ様をご実家に届けたら休ませてあげるから、もう少し頑張ってね」

「きゅうう」

任せるとばかりに鳴く。

「……かわいい鳴き声」

エリネ様は面食らって眩くらした。

「そうですね。見た目に似合わない鳴き声をしていますね。命令がなければ吠ほえないように訓練しています」

「賢いんですねえ」

「この子に乗って、飛んでみますか?」

そう問うと、エリネ様は小さな子供のように目を輝かせた。

「本当に、乗っていいの？ 乗ってみたいー」

うん、可愛いし、面倒くさくなくて良し。

私はルゼ。今はルゼ・デュサ・オブゼーク。

私の人生はなかなか波瀾万丈である。孤兒だった私は領主様の病弱な息子、ルーフェス様の身代わりを依頼され、男装して騎士になった。それが王子様であるギル様ことギルネスト殿下にバレて、気づけば領主様の『娘』にさせられていた。半年ほど貴族の令嬢らしく振る舞い、時に諜報活動をし、時に囮おとりとしてうろつき回ったりと、ギル様のお

役に立つために奮闘していたのだが、色々あって今度はルゼとして女騎士になり、今に至る。

その色々の中心が、今竜の背に乗って興奮している、このエリネ様だ。

ふわー、とか言葉にならない声しか出てこないようなので、私は彼女に軽く説明をすることにした。

「エリネ様とはある事情により、陰謀に巻き込まれておいでです」

「は？ い、陰謀って、あたしなんか、どうして!？」

エリネ様の疑問は、まったくもって正当なものだった。

「あたしなんかを無理やり嫁にするような陰謀って、一体何なんですかつ!？」

私が騎士になってまでここに来た理由がまさにそれなのだ。エリネ様を狙う者は陛下を出し抜いて彼女を我が物にしようとしたらしい。

「申し訳ありませんが、今は詳しいことはお話し出来ません。話をするのは私ではなく、後から参る者達です。何故というご質問に答える権限を私は持っておりません」

腕の中のエリネ様は、きよとんと青い瞳で私を見上げた。

なびく金髪は、天族のノイリよりも色合いが濃い。瞳の色は空のような青。北部の人間に多い特徴なのだが、何故こんな南の方にいるのだろう。商人ならともかく、彼女は

農民の娘らしい。

だが、そんな個人の事情とかも、生まれも育ちも今回のことにはまったく関係ない。

この可愛いだけに見える女の子は、聖女である可能性が高いのだ。王以上に人々から愛され、敬われる存在である聖女。彼女が狙われたのも、その後ろ盾となれば絶大な権力を得られるからだ。正式な婚姻を結べば簡単に引き離すことは出来ないため、性急に行動に出たのだろう。

彼女が聖女であるという情報にはかなり信憑性があるらしく、聖騎士団まで結成されている。とはいえ確定するまで、本人には伝えないようにと言われている。

もともと何故聖女として有力視されたのか知らないから、伝えようがないのだが。どうやら本人にも心当たりがないようだから、癒やし力なんという分かりやすいものではないらしい。

だからこう答えるしかなかった。

「大丈夫です。決して、悪いことはありません。私が必ずお守りいたします」

彼女を不安にさせてはならないので、私は余裕のある微笑みを絶やさないように心がける。彼女はおずおずと私を見上げた。

「どうなさいました？ 何か思うところがあれば、何でもおっしゃって下さい。答えら

れる範囲で答えます」

まずは彼女の信頼を得なければならぬ。彼女を救い出し、相談にも乗れば、まあ信頼してもらえらるだろう。

「あの、あたしの村、あたしがお嫁に行かないと、みんなの税を上げるって」

青盾の騎士を動かした奴らは、思った以上にゲスい方法でこの子を生贄として差し出させたらしい。

「私はまだ到着したばかりで詳しいことを聞いておりません。もしお辛くなければ、話を聞かせていただいてもよろしいでしょうか」

私はここに来る前、エリネ様の村を通り越して、彼女が護送される予定だった都市に向かい、そこで聖女を守る非正規団体、火矢の会の人からどうすればいいのかを聞いた。そこで、童を持つ私がエリネ様を救い出し、先に村までお送りするというところで話がまとまったため、こうして飛んできたのだ。だから本当に、詳しいことは何一つ知らない。ここからは独自の判断で動かなければならない。

「隠すほどのことじゃないです。あたしもよく分かんないんですけど、どっかの貴族にうちの領主様が借金をしていて、私とその貴族に嫁に行かなかつたら税を倍にするって。今でも高いぐらいなのに」

「な……なんて横暴なっ」

女からすれば、許しがたい蛮行である。美女を愛人にするため、両親を人質のようにするのはよく聞くが、村一つ人質にとるなど聞いたこともない。

「なんであたしなんかを嫁にしたがるのか、さっぱり分からないんですけど、あたし、知らない間に何かとんでもないことをしてたんですか？」

なかなか賢い人だ。事の本質をちゃんと理解している。

「先ほど申し上げましたが、エリネ様には何の落ち度もございません。ですが、奴らがこのようなことをした理由は、私に来た理由と同じでしょう。動くのが遅かったばかりに、不安な思いをさせてしまい申し訳ありません」

私はエリネ様の手を握って謝罪した。

「相手の男はさつちりと罰します。もちろん皆さんに迷惑が掛かるような方法ではないのでご安心ください。二度とこのようなことがないよう、この地の領主も、別の者に代えます」

「え？ 代えられるんですか？」

エリネ様は驚いて、澄んだ瞳を見開いた。

「こちらの領主達がしたことは立派な犯罪です。本人は投獄し、縁者の中から人格者を

選んで跡を継がせることになります。共犯者の可能性があるのです、息子や兄弟といった順当な跡取りがそのまま家を継ぐことはありません。二度とこのようなことを起こさぬために、国からの監査が入ります。適任者が誰もいなければ、お家取りつぶし、財産没収です。基準はかなり厳しくなっているのでご安心ください。何とか新しい当主を立てたとしても、その後、万が一逆恨みで何かしでかそうものなら、民衆の訴えで簡単にお家取りつぶしができます」

これは私の友人で、ギル様の従弟のセルジアスに聞いてきたことだ。

「そんな制度があったなんて」

「過去に公平な方がいらつしゃったんでしょね。しかし貴族にとつて不利な情報を平民が知るのとはなかなか難しいです。そういう法を行使されれば困る人ほど隠したがるでしょうから」

そして必要のない状況では、誰もそういったことを調べない。知っても話の種にする程度だ。

「今では建前のような法律なので、滅多に行使されることはありませんが、今回は悪質ですから間違いない国も動くでしょう」

何せ、国王陛下を出し抜こうとしていたのだ。ここまで大きなことだと知ってのこと

か、はたまた誰かに適当なことを吹き込まれたのかなどは知らないが、こんな企みに乗るなど実に馬鹿なことをした。

「そうなんですか？ 悪質なんですか？」

「ええ。女性を差し出せなど、問題外です。それほどの馬鹿なら、脅迫の証拠は山ほどあるでしょうから大丈夫。エリネ様はもう、そんな卑劣な男の妻になる必要はありません」
エリネ様は前を見ているので表情は見えないが、きつと喜んでいるのだろう。もしかしたらまだこれが現実だということ信じられずにいるのかもしれない。

「エリネ様、あそこに見えるのがエリネ様の村でよろしいですか？」

「え……あ、うちの村です。もう見えるなんて、速い！」

エリネ様は反対側を見ていたから、気づかなかったようだ。上から見ると、見慣れた場所でも違う場所のように見えるし。

村の上空までやってくると、村人達が気づいてこちらを指さした。どこでも反応は同じだな。

キュルキュを村の広場に着地させると、人々がわつと群がってきた。

「な、なんだ!？」

「エリネだ。竜騎士様がエリネを連れ戻して下さった!」

村人達は嬉しそうにエリネ様を迎えた。生贄いけにえとして差し出したはずの彼女が戻ってきたら、怒り出す者がいるかもしれないと覚悟していたが、見る限りはみんな喜んでいる。私の制服の効果もあるだろうが、土地柄というのものもあるだろう。嫌な人達でなくて本当によかった。

「誰か、ルイカとアエンスさん呼んでこいっ！」

エリネ様が村人のその声に反応した。ここで呼ばれるのだから、おそらく身内の方だろう。

私は先にキュルキュから降りて、エリネ様に手を差し出した。身を任せて下さったエリネ様の腰を抱き、ゆつくりと地面に下ろす。

「ご気分はいかがですか？ 吐き気などはございませんか？」

「だ、大丈夫っ、ですっ！」

エリネ様は慌てた様子で二度頷いた。可愛いな。

「エリネっ、帰してもらえたんだね、よかったよ！」

近くにいたおばちゃんがそう言って駆け寄り、エリネ様を抱きしめた。それを皮切りに、次々と人々が集まり、彼女に喜びを伝える。そしてエリネ様はしがみつく子供達を優しく抱き返していた。

人々に好かれているようだ。性格が悪くて、喜んで追い出されたのでなくてよかった。この様子だと、実は新しい聖女様せいじょさまは性根ゆがが歪んでいる、などの心配はなさそうだ。出来れば良好な関係を築きたいから、性格矯正などはしたくない。これなら徹底的に礼儀作法を教え込むだけで、何とかなるだろう。それは私の仕事ではないから、楽が出来そうだ。嫌な人でなくて、本当によかった。

「ねえちゃん、よかつ、よかつた」

「ちよ、鼻水が付くじゃない。っていうか、私の服で拭かないで！」

エリネ様は子供の頭をほこりと殴る。微笑ましい光景だ。どう見ても彼女は普通の女の子だ。この辺りでは色素の薄い髪や瞳は珍しいが、それでも特別な少女には見えない。どうして彼女が聖女だと分かったのだろうか。見て分かるような能力であれば、このように大きくなるまで放置されない。しかし彼女が聖女だというのは、かなり確信があることのようにだから、何か切っ掛けがあつたのかもしれない。その時、村人をかき分けて男女が駆け寄ってきた。子供達が空気を読んでエリネ様から離れると、男女はエリネ様とひと抱き合った。

この村に馴染んだ、どこにでもいるような中年女性と、眼鏡をかけ、エリネ様よりも色素の薄い金髪をした中年男性。

「お母ちゃんっ、お父ちゃんっ！」

「ああ、本当にエリネだ。ああ、エリネっ」

「ごめんね。本当にごめんなさいね」

私はしばらくその感動の再会を眺めていた。親子というのは、やはりいいものである。「一体どうして戻ってこられたんだ？ そちらの方は？」

父親は、ちらりと私を見てエリネ様に尋ねる。

「ご安心ください。私はルゼ・デュサ・オブゼークと申します。この事態を聞きつけた上官の命令により、エリネ様の保護に参りました」

沈黙が落ちた。

「め、命令？ 一体エリネは何に巻き込まれたとおっしゃるのですか？ そんな竜に、白月まで持つ騎士様が……」

彼はすぐに私がつけている階級章に気づいたようだ。白月も竜騎士も、エリートコースの一つである。構えるのも無理はない。

「今はまだ詳しいことはお話しできませんが、上の者が到着したら必ずお話しいたします。陸路でこちらに向かっているので、少々時間がかかるかもしれませんが、ご息女が望まない結婚をする必要はなくなりました。もちろん、皆さんには絶対手出しをさせま

せん」

村人達はざわめいた。

「領主様を代えられる法律があるんだって！」

エリネ様が言うのと、彼らは顔を見合わせた。

「父ちゃん、神様なんていないって言ってごめんな。オレ、これから毎日お祈りするよ」「あたしもっ」

子供達は純粹で可愛いな。とはいえ、エリネ様がエリネ様でなければこんなことにはならなかったのだから、少し複雑な気分だ。

「皆様と皆様の生活は必ずお守りいたしますので、ご安心ください」

「きゅううううっ」

私の後ろで、キュルキュウの威嚇いかくするような唸りうなりが聞こえた。振り返ると、さっきエリネ様にしがみついていた子供が、今度はキュルキュウにちよつかいをかけていた。

「こちら、嘸まれても知らないよ。この子疲れて機嫌が悪いから」

キュルキュウは私の肩に額を擦りつけてくる。これはおねだりの仕草だ。

「お腹すいた？ 朝からずっと飛びっぱなしだったもんね」

私は荷物の中から、キュルキュウ用の果物を取り出した。

「え、果物を食べるんですか？」
エリネ様が驚いて問われた。

「この子は雑食です。肉と果物が大好きですが、主食は穀物です」

キュルキュはあつという間に果物を二つ食べ、もつともつとねだってくる。

「喉が渴いたのかな。この子に水をやりたいんですが、水場はどちらにありますか？」
「それならそこに」

広場の隅にある井戸を指し示された。置いてあった桶に、見ず知らずのおじさんが水を汲んでくれ、キュルキュは美味しそうにそれを飲む。

「おー、たくさん飲んでるなあ」

水を用意してくれたおじさんが、目を細めて笑った。

「すげえ、これ食うか」

子供達が野菜を地面に置いた。

「ごめんね。この子、地面に置いた物は食べないように躰しんけてるんだ。ほら、竜つて高いでしょ。もし拾い食いしてお腹壊したり、毒のある物を口にしたりしたらシャレにならないっていうか」

「そっか。高いんだ。高いよなあ」

子供はしみじみと言った。

人間の命以上に高いから、人間よりも大切にされてるぐらいだ。

「私がいる時に手渡しするなら食べるよ。あ、泥が付いてると嫌がるから、洗ってね」
「あ、そっか。贅沢ぜいたくだな」

子供は言われた通りに野菜を洗ってきて、恐る恐る差し出した。キュルキュはくんくんと匂いを嗅かいでから、私を見る。

「食べていいよ」

許可を与えると、口を近づけて一口で食べてしまった。子供は慌てて手を引っ込め、大袈裟おおげさにはしゃぐ。

「きゅう」

キュルキュはもつととばかりに、手を上下させておねだりしている。

「犬っほい」

「これも食うか」

男の子はどこからか別の野菜を一束持ってきた。大人達はそれを叱りもしない。南とはいえまだ寒く、春の恩恵があるのはこれからのはずだけだ。

「いいんですか？」

「ああ、いいですよいいですよ。エリネを連れ戻して下さった騎士様は何をおっしゃるんですか」

子供の親らしき男性が言った。

「うちの村の野菜は、こころで一番美味しいんですわ」

「そうですか。この子も気に入ったようですね。普段いい物を食べさせてもらっているから、舌が肥えてしまつて……」

この子を預かっているエノーラお姉様は、それはもう甘やかしているのだ。

キウルキュは野菜をもらったことで敵ではないと判断したのか、上機嫌で子供達に撫でられている。人に撫でられるのに慣れたのも、エノーラお姉様のせいだろう。

「あ、この子は大人の男性は苦手なので、触らないで下さいね」

男親の一人が手を伸ばしたので、私は慌てて忠告した。

「一度攫さらわれかけたことがあつて、それ以来、よく知らない大人の男性だけ警戒するようになったんだそうです」

いつだったかテルゼに聞いた事情を説明すると、彼は残念そうに手を引つ込めた。

「高いと大変なんだなあ」

子供達がキウルキュに野菜をあげながら、宥なだめるように撫でた。

「そうだよ。人が欲しがるってことは、価値があるってことだからね」

「じゃあ、エリネ姉ちゃんも価値があるのか？」

「賢い子だね」

私は正解は言わずに、男の子の頭を撫でた。

「やっぱりアエンスさんの実家関係？」

「馬鹿な。うちに、ここまでするような価値はありませんよ」

アエンスさんとは、エリネ様のお父様のことのようだ。この村で一人だけ雰囲気の違いすぎるから、きっと何か訳ありなのだろう。

「ご安心ください。今回の件にどのような訳があるかは存じませんが、ご実家は関係ありません」

彼らはますます困惑した。まさか自分の娘が聖せいじょ女候補だなどとは思うまい。

「この前から、変な男達がうるちよろしていたのは関係あるんですか？」

「それは関係あると思います。ですが私は竜に乗れるから先に来ただけで、実のところは何故エリネ様が狙われたのか、詳しくは知らされていません。上の者が、それも含めてきつと説明いたしますので、それまでお待ち下さい。ですが、決して悪いことはありません。それだけは保証します」

皆はほっと胸を撫で下ろす。

「しかし今後悪いことにならないとは、まだ保証いたしかねます」

「どういう意味ですか？」

私の言葉に、アエンスさんが眼鏡を直しながら問い返す。

「正式な使者である私を排除して、奴らがエリネ様を取り戻しに来る可能性も否定できません」

「そんな……」

「それだけのことが起こっています。エリネ様を従わせるために、ご両親や皆さんを人質にする可能性もあります」

皆がざわめいた。

「都からの応援がこの村に向かっています。それにもし今回私が間に合わなかった場合に、エリネ様を奪還するため向こうに待機していた仲間もいます。今、馬でこちらに向かっている途中なので、すぐに到着するでしょう。夜は彼らに巡回してもらいます」

村人達はそれを聞くと安堵したようだった。

「皆さんも今夜はくれぐれも用心して、日が暮れたら外に出ないようにして下さい。私はこれから安全確認のために村の中を見て回りたいのですが、どなたか案内していただ

けませんか？」

私が周囲を見回すと、皆も周囲を見回す。その中の一人のおっちゃんが手を上げかけた時、

「それだったら、あたしが」

とエリネ様が申し出て下さった。

「エリネ様はお疲れではありませんか？」

「あたしずっと座ってたから」

家でじっとしていると言われても、それはそれで不安だろう。見知った場所を歩いて、少し落ち着いてもらうのも悪くないかもしれない。

「では、案内いただけますか？」

「は、はい」

エリネ様は頬を赤らめて、とても可愛らしかった。

そよ風が木漏れ日の作る影を揺らし、光を雨のように降らせる。爽やかな、心地よい春の匂いを感じる。

「いい土地ですね」

私は村を見て回りながら言った。小麦がよく育っている。きつと豊作だ。エリネ様と子供達、そしてエリネ様のお母様ほか、大人の女性達がぞろぞろとついてきている。男衆は、きつと話し合いをしているのだろう。

「そうですか？ 田舎過ぎて畑以外はなーんにもないんですけど」

エリネ様は不思議そうに言った。

「実り豊かないい土地じゃないですか。空から下を見てきましたけど、この辺りは作物がよく育っている気がします」

他と比べたわけではないから、断定は出来ないが。

「ずいぶんと長い間、食べ物で困ったことはありません。娘が生まれる何年前に、雨が降らずに不作になったつきり、ずっと豊作続きですよ」

エリネ様のお母様が自慢げにおっしゃった。ここの子供達は恵まれているのだろう。羨ましい限りだ。

「暖かいからでしょうかね。都ではもう一度雪が降ってもおかしくないのに、ここではコートがいらないうらいです」

キュルキュルに乗るために温かくしてきたのだが、ここに来たらけっこう暑くなつてしまいいいコートを脱いでいる。

「都是寒いんですねえ。あたし、雪なんて一度も見たことないです！ 綺麗だってお父ちゃんから聞きましたけど、ホントに真っ白になるんですか？」

エリネ様は懂れるような表情で言った。雪が降らないとか羨ましいな。

「真っ白ですよ。見てる分には綺麗なんですけど、寒くて寒くて死んでしまいいいそのなので、私はあまり好きではありません」

「お父ちゃんも同じこと言っていました」

彼女は自然な様子で笑っている。村に戻ってきて、ずいぶんと緊張がほぐれたようだ。「なあ、騎士様はなんでこんな所に来たの？」

私の隣を歩きながらキュルキュルにじゃれていた男の子が尋ねた。

「それはまだ秘密。先に言ったら怒られてしまうからね」

「ケチ。エリネねえちゃんは、なんも悪いことしてないよ」

「それは知っているよ。だから私は来たんだ」

自業自得であれば、助けになど来ない。

「騎士様は正義の味方なの？」

「私は正義を振りかざすのは好きではないな。どちらかというところ、か弱い女性の味方だ」子供達は、おおっとどよめいた。子供は何に反応するか分からんな。

「都会の騎士様は言うことが違えな〜」

「なんかいい匂いもする」

「私の実家では花を育ててるんだよ。春になったら、花だらけになる」

「いいなあ。うちの村もそういう所ならよかったのに」

女の子は私の匂いを嗅ぎながら羨ましがった。

「そんなことないよ。凍死しなくて、食べる物にも困らないのが一番いいよ」

ここはふくふくとした子供達ばかりだ。まだ冬が去ったばかりだというのに、食べ物に困っている様子はなかった。税は高いと言っていたけど、今までは搾取されても農民が困るほどではなかったのだろう。

「なあ、この竜はどうしたんだ？ 騎士団で飼ってるのか？」

男の子がキュルキュの背によじ登りながら尋ねた。物怖じしない子だな。

「知り合いにもらったんだ」

「んなもの、誰がくれるんだよっ!？」

「家畜みたいに竜を育ててる施設の所有者だよ。これでもまだ五歳ぐらいの子供なんだ」

「へええ……そんな所があるんだ」

子供達は自分達の知らない世界を知って、感慨無量といった様子で頷いた。聞きたいことがたくさんあるのは当然だろう。こんな田舎に住んでいれば、他所から人が来ることなど滅多にない。せいぜい、顔見知りの商人と配属されてきた騎士ぐらいいだ。

「なあなあ、どうしたら白い騎士様になれるんだ？」

「青は嫌なの？」

「あいつら嫌いだ。騒がしいし酒ばっかり飲んでるし。でも白い騎士様はみんな紳士だって聞いた」

「青いのもいい奴の方が多いんだけどね。領主様の力関係で、いいのは力のある人の所に取られていっちゃうから。うちの実家のあたりもろくなのがいなくてね。最近は私が出世したから、いい人が来てくれるようになったけど」

子供達は竜を見た。出世の象徴のように見えるのかもしれない。高いから。

「騎士になっても、貴族じゃないと偉くなれないのかなあ」

「本当はこの土地の偉い人が頭角を現してくれるといいんだけどね」

「この辺の貴族は、女ばかりだから無理だ」

男は跡取りしかないか、それすらもないということか。

「騎士になって、偉い貴族出身の騎士と上手くお友達になるっていうのも手だよ」

「騎士になるにはどうしたらいいんだ？」

「平民が騎士になるにはね、ちよつとだけ頭が必要だよ。字がまったく読めないとか都合なことがあるからね。貴族達は兵役義務があるから、頭の中身を知るために試験は受けるけど成績は重視されないよ。たとえ平民なら落ちるような点を取っても、騎士をやらなきゃならない」

「貴族は馬鹿でも入れるのか。いいなあ。だけど馬鹿だと給金が下げられるとかはないの?」

「それはないね。貴族は秋の試験を受けることが多いけど、馬鹿の場合秋を受けても入隊を春に回されるぐらいかな。春の試験は採用人数が多くて、平民の割合がとて高い。試験は身体能力重視で、筆記試験は秋よりずっと簡単なんだ」

「つまり、馬鹿な貴族は、馬鹿と一緒にいるってこと?」

「そうなるね。でも、貴族が春の試験を受けるからって、馬鹿っていうわけじゃないよ。腕に自信があつて、あえて春に受ける人もいるらしいから。あと、他の貴族に苛められたりするのが嫌な人も春に受ける。弱いのに春の試験を受ける貴族なんて、馬鹿で、しかもそれを買収で誤魔化せるだけの力がない貴族だからね」

「春だとそんなに簡単に入れるの?」

「簡単って言つても、程度はあるよ。騎士は命がけの仕事だけど、傭兵よりは安全で安

定してるから、倍率も低くないしね。買い出しをしたり、釣り銭をちよろまかされたりしない程度の計算をしたり、簡単な命令書を読むぐらいの頭はないといけないから。だから春の試験は簡単な読み書き計算や常識問題とからしいよ。騎士になるための本があるけど、その本が読める時点で十分なぐらいだつて聞いたな。あと、適性審査みたいなものもある。殺人鬼一歩手前の人とか、虫も殺せないような人じゃあ、雇うだけ無駄だからね。身体を鍛えて、そこそこ勉強すればまあ何とかなるよ」

そのそこそこの勉強が出来ないような貧しい村ではなさそうだから、気軽に言えるのだけだね。

「めんどくせえなあ。強けりゃいいじゃん」

「もちろん剣の実力だけで採用される人はいるみたいだよ。ごく稀にだけ。魔物に囲まれても、返り討ちにしてしまうような、本当に強い人じゃないと無理だろうね。一人でそんな高みを目指すよりは、素直に試験対策の方がいい。そんな体力馬鹿は、危険なことばかりさせられて、捨て駒にされかねない。そういう方向に突出しすぎるのはよくないんだ」

「あー……」

納得してくれたようだ。

「勉強は大切だよ。基本的な学がないと人に騙だまされやすい。もちろん、学があるからこそ騙される場合もあるけどね。読むことが出来れば、大切な情報を見逃しにくい。情報を自分で調べることも出来る。計算が出来れば、商人に騙されない。商人の中には、わざと複雑な計算をして誤魔化しながら高いお金をとる人もいるから。専門的な知識になると普通に暮らす上では無意味なことが多いけど、最低限はあった方がいい。試験に必要なのは、その最低限だから」

どこにでもある牧歌的な風景を眺めながら語る。エリネ様のお母様は、そんな私をじつと見つめていた。何か気になることがあるのだろうか。

「あの……騎士様は、お化粧してるんですか？」

エリネ様のお母様に指摘され、私は自分の頬に手を触れた。

「え……ああ、しています。たしなみのようなものです」

「都会では騎士様までお化粧するんですか!？」

女性達は顔を見合わせ、化粧をしていない自分達の顔を見比べた。

「普段はしなくても、公式の場でする者はたくさんいます。荒事あむじをしているので傷はつくし肌も荒れたりするんですが、そんな汚い顔で貴人きじんの前に出るのは失礼ですからね」

「どなたか貴人に会われてたんですか？」

「ええ。私がおここに居るのは、国王陛下の命を受けてのことですから」

「お、王様に？」

「はい」

ご婦人達はさらにざわめいた。一体何が起こっているのだと混乱している。村の少女をめぐる陰謀、謎の騎士。他人事ひとことだと、なかなか楽しそうである。

「いいなあ。私もお化粧したい」

しかし子供としてはまだ陰謀に対するワクワクよりも、目先のものへの憧れの方が強いようだ。

「何を言っているの？ 君の肌はこんなに綺麗なのに、お化粧なんてしたらもったいない。唇も荒れてないし、髪も油を塗る必要がないぐらい艶つややかだ。君はそのままでもとても綺麗だよ」

お化粧したいと言った女の子の頬を撫なでると、彼女は頬を真っ赤に染めた。可愛いな。

「キザでえ」

「女の子はほめられて綺麗になるんだよ。可愛い子には可愛いと言ってあげないと。花だって、ほめられればより綺麗に育つんだ」

「……………」

男の子はぼかんとして私を見つめた。

「騎士様は、なんかすげえ騎士っぽいな」

「ありがとう。出がけにもらったお菓子でも食べる？」

「騎士様、マジいい騎士様」

子供達が抱きついてきた。現金なものだ。

私はキュルキュに括り付けた荷物の中から、飴あめの入った袋を取り出した。どこに行くにしても子供達を懐柔かいていろうするにはこれに限るという、エノーラお姉様のありがたい配慮だ。

子供達に一粒ずつ行き渡ったのを確認すると、今度はご婦人達にも配った。

「これは、ここにいる皆さんだけの秘密ですよ。殿方は、仲間はずれにされると拗すねてしまいますからね」

彼女達は顔を見合わせ、くすくすと笑う。

「本当に騎士様は紳士的ですね。ここに来る騎士は、子供のはねた泥が少し裾すそに付いたぐらいで殴るような人達で……」

エリネ様のお母様が、ため息混じりに言う。

「それはいけませんね。いたずら小僧を叱るならともかく、汚れたからと言って殴るなんて。申し訳ありません。後で言い聞かせておきます」

まったく最悪だ。紳士であれとまでは言わないが、善良でいてほしいものだ。

さてどうしてくれようかと考えていると、いつの間にか村を一周していたらしく、広場に戻ってきた。

そこには、青盾せいしゆんの騎士達がいた。人数が多く、数えてみると十人もいる。

私はくすくすと笑いながら、皆の前に出た。

「どうしてこんなにも騎士がいるんだろうね」

確かにここは魔物だけではなく、魔獣まじゅうも出そうな土地だ。魔獣とは魔物と違い知性がなく、言わば魔力のある野獣のことだ。特に春先の魔獣は気が立っていて危険であるため、主に騎士達が退治することになる。

だとしても、農村にいる騎士にしては人数が多い。いなくてもおかしくないぐらいの人口なのに。

迎えにもそれなりの人数が来ていたし、エリネ様のことがあるから多めに置いていたのかもされない。

「応援だっけ。よく害獣が出るから、この半分ぐらいはいつもいるけど」

男の子が教えてくれた。

「それはつまり、この人数は今だけ特別ということですか？」

「そうだよ」

エリネ様がびくりと震えて、お母様の背に隠れた。

「大丈夫ですよ、エリネ様。心配することなど、何一つありません」

出来るだけ優しく微笑み、彼女達を安心させるように努めた。状況が分からない時に、こうして堂々としている人がいると安心するものだ。この人に任せておけばいいと思っ
てくれる。

私は微笑みながら前に進み出た。

「一体何事ですか？」

「お前か、娘を連れ戻したという奴は」

騎士のうちの一人は、顔に痣があつた。おそろくさつき殴り倒した奴だろう。どうやらこの連中と合流したようだ。

「そんな顔をなさらないで下さい。子供達が怯えています。騎士たるもの品性を大切に
して下さい」

私は怖い顔をしている彼らに、優しく諭すように言った。

その忠告のせいか、一番年長の中年騎士が顔に笑みを貼り付けて前に進み出た。

「失礼ですが、階級章を見せていただけませんか？」

「構いませんが」

首の上に反らし、襟元につけた白月の階級章を外して渡した。中年騎士はそれを受け
取ると、ひっくり返して確認する。

「これは三年前に任命された者の階級章ですが」

そんなことが分かるのか。よく見てなかった。

「ああ、それぐらいでしょうね」

「どう見てもあなたはまだ十代ですが」

「ええ」

「そのような若さで白月を賜与されるはずがない。そんな方は一人しかいないはずだ」
なるほど。けっこう物知りだな。

「どこでこんな物を手に入れた」

鬼の首を取ったような顔で威嚇する男達を見て、私はまったくすくすくと笑った。

「どこでだと思えますか？」

私の余裕の表情に騎士達も少し怯んだが、すぐにそれを押し隠して胸を張る。

「何より、この年に白月になられたのは、ギルネスト殿下ただお一人。貴様なぞが持つ
ているはずがなからう。よく出来た偽物だ」

子供達がざわめいた。

偽物と判断したか。その気持ちは分からなくもない。一見普通の少女であるエリネ様を、ここまでエリート要素をそろえた騎士が迎えに来るはずがないと思っただろう。事情を知らなければ、そう思っても仕方がない。むしろ状況を察する者がいたら、そいつは怪しい。

私は彼の言葉を一蹴するように鼻で笑った。

「それがどうした？」

彼らは私よりもずっと体格がいい。私は背が高いといっても、それは女の中での話だ。私は彼らに比べれば、華奢で、かよわく見えるだろう。一度私に叩きのめされた騎士は、今度は油断していないから大丈夫だと思っっているのかもしれない。思えば私も甚だしい。

「くだらないことを話し合う前に、一つだけ事実を教えよう」

私はそう言った後、女性と子供達を振り返る。

「皆さんはこのおじさんと、私と、どちらの言うことを信じますか？」

「騎士様」

私の前にいるのも全員騎士様だ。しかし、子供達の目は私しか見ていない。

本物とはいえ今まで信頼の一つも築けなかった『クソつたれ騎士』よりも、偽物かもしれないが優しい『騎士様』の方がいい。むしろ、この人が騎士でいい。この人がいい。と思うのは当然のことだ。

「どうしてそう思う？」

「だってこいつらしく怒るし、殴るし、働かない。いつも父ちゃんらが害獣追っ払ってらるもん」

子供が騎士達にべーと舌を出したので、私はとても満足した。

「いい子達だね。後でキュルキュに乗せて遊んであげるよ」

「マジ？ やった！」

子供達のはしゃぎ、騎士達がむっとする。

その騎士達の背後に、どこかで話し合っていた村の男衆が次々と集まってくる。

「確かにそれはギル様……ギルネスト殿下の物。私は階級章が出来るまで待っていられたので、今はお使いになられていないものをお借りしたのです。あの方は今騎士団を統べる紫杯になられて、それは机の中に眠ったままになっていたのです」

私はにこにこ微笑みながら、事実のみを語った。

殿下——王子様から借りるなど、親しくなければ不可能。しかし、親しければ可能だ。

だから皆は戸惑う。

「それは私のために作られた物ではありませんが、希少価値の高い月石が使われた正真正銘の本物。こんな物をわざわざ偽造して、ケチな詐欺のようなことをしてどうするんですか」

今、私はとても苛立つている。まったく信頼されていないこの連中は、実家のある街にいた騎士達を思い出させる。

国境の森に近い、魔物も魔獣も盗賊も出る地域だ。それなのに、ろくに働かなかったあいつら。花を育てるようになったのも、食べられない物を育てていた方が狙われにくく安全だからだ。

「エリネ様を拐かしに来たのであれば、わざわざ身分を偽る必要などありません。あなた方程度なら皆殺しにして攫っていきます。うぬほれないで下さい」

竜も持っているから説得力はあるだろう。それに私が偽物であれば、わざわざエリネ様に対して親切にしたり、子供達を構ったりする理由などない。

「そんな女を攫ってどうなるというのだった」

「己の狭い見でしか見られないなら、口を閉じていなさい。恥をかくだけです。私は心が広いので、皆さんの無礼にも目をつぶりましょう」

私もずいぶんと嫌みで偉そうだな。しかしこうして自信満々に言っておけば、普通は怯む。

「分かったら戻りなさい。あなた達が束になっても私には敵いません。試してみたいというなら、相手になりません」

自信に溢れた立ち振る舞いで、自信に溢れた言葉を投げる。

「へえ。白月様がお相手くださるんですかあ」

一番若い騎士が食いついてきた。まだ十代に見えるが、体格がよく、いかにも力自慢という風貌であった。直情的で、阿呆だな。まあいい。

「望みとあらば相手をしましょう。そうすれば、本当の意味で私の言葉を理解できるように」

「では遠慮無く」

若い騎士が剣を抜くのを見てから、私もゆっくりと剣を抜く。

優雅に、凛々しく。

出来れば美しく言いたいところだが、こればかりは私では難しい。相手が粗野なので、ひよっとしたら見る者によっては私でも美しく見えているかもしれないけど。

「ルゼ様、頑張って下さいっ」

エリネ様が声援を下さった。私は思わず振り返って微笑む。

「ありがとうございます。エリネ様の騎士の名に恥じぬよう、頑張りますね」

エリネ様は顔が熱くなったのか、頬に手を当てた。

喜んでもらえたようだ。私に対する好感度はかなり上がっただろう。

私は視線を戻すと、若い騎士に小馬鹿にしたような笑みを向けた。

「さあ、どこからでもどうぞ」

余裕たっぷり、挑発するように促した。

彼は舌打ちし、剣を上段に構えて斬りつけてきた。手加減をする様子もなく、殺そうとしているように見える。

それが伝わったのか、観客となった村人達は手で目や口元を押さえた。

剣が振り下ろされるよりも早く、私は騎士の脇をすり抜ける。

そのまま、騎士はどざりと倒れた。

大振りな一撃を躦かわし、すれ違いざまに剣の柄つかで脇腹を殴りつけたのだ。

「……ルゼ様、すごい、強いっ！」

エリネ様が黄色い声を上げた。女性達がキヤアキヤアと楽しげに騒ぐ。

「当然です。魔術と剣の腕を兼ね備えてこそ白月しろつき。そうでなくてエリネ様にお仕えする

など、おこがましいことです」

私は笑みを浮かべたまま、怯ひるんでいる騎士達を見た。

「弱すぎる。一体あなた達は普段何をしているのですか？ その気があるなら、まとめ

てかかっていらつしゃい」

私の言葉に三人の騎士が剣を抜く。やる気らしいから、私から動くことにした。

私一人目の剣を受けている隙に、二人目が恥も外聞もなく斬り掛かろうと背後に回

り込んできた。

私は一人目に足を絡めて、二人目の騎士の方へ押し飛ばす。昨日、似たようなことを

したばかりだから、身体がすっかりこの手のやり方に慣れてしまつて、軽い軽い。

同士討ちしそうになつた二人は、慌てて抱き合うように地面に転がった。

三人目がそれに目を奪われた隙について喉元に剣を突きつけると、彼はあっけなく剣

を落として両手を挙げた。

「次、来ますか？」

「滅相もない。これはお返しいたします」

年長の騎士は引きつった顔で首を横に振り、ギル様の階級章を返してくれた。私は襟えりにそれをつけ直しながら言う。

「理解していただけて嬉しいですよ」
 実力の差を思い知っただろう。私はまだ魔法らしき魔法を使っていない。そして竜もいる。

これだけ要素を揃えれば、王子様から借りたという言葉にも現実味が出ただろう。だいたいは事実だし。本人が出張でいないから、まだ承諾を取っていないというだけで。

「すげえ。すげえな、騎士様」

男の子達が我に返って騒ぎ始めた。

エリネ様が、熱に浮かされたように私を見ていた。目は潤み、身体は震え、頬は赤い。「エリネ様、ご安心ください」

私が声をかけると、彼女も我に返って頬に手を当てた。

「ご、ごめんなさい。あたし、こんな強い女の子がいるなんて、思ってもいなくて、ちょっと興奮してるみたいです」

女だと気づいていたのか。身体を密着させたし、別に隠してもいないから当然なのだけだ。

でも、ますます気に入ってしまった。そう、気付かない方がおかしいのだ。

「お、女っ!？」

騎士達はエリネ様の言葉を聞いておののいた。見る目のない連中である。

「男だと言った覚えはありません」

「や、やはり偽物か。女が騎士など、あり得ない」

「あり得ますよ。目の前にいるじゃないですか。この国では私が初めてなので、知らなくて当然ですが」

「馬鹿な。女が騎士など」

今さっきやられたばかりの騎士がわめいた。

「女性の騎士がいけないのは、募集要項に男性と書かれている上に、普通の女性にはその力を見せる場がなく、さらには、騎士にとって女性は守る存在という考えがあるからです。しかし国王陛下に認められれば、女でも騎士になることが可能です。私は力を以て陛下に認めていただきました」

ギル様を捨てた元恋人も、剣士だったらしい。しかしこの国では、女性に護身術以上の力など求められなかった。だから女性の軍人登用がある国に行ってしまったらしい。

「見せる場……あなたはどうかやって見せたというんですか」

「もちろん陛下の許可を得て、騎士達と片っ端から決闘しました。手加減されぬよう、元々騎士をしていた双子の兄のふりをして。数え切れぬほど叩きのめしたら、陛下が私

に白月しろつきを下さいました」

彼らの顔が引きつった。話半分に捉えても、十分大層なことに思えるだろう。ただくだいたいは本当のことだ。

「エリネ様、見苦しいところをお見せしました。申し訳ありません」

「そ、そぞ、そんな！ すごく、ものすごく格好良かったですっ！」

彼女は大袈裟おおげさな身振りで訴えてくる。元気を出してくれたようだ。明るくて可愛いな。「騎士達への不安は解消されましたか？」

「は、はい」

騎士達も、まだ女の子といった年頃の私にあっさりと負けた今、これ以上の恥の上塗りはしないだろう。私の言うことが本当なら、国王陛下に逆らうことになるのだ。エリネ様を手に入れようとする連中にも不信任を抱いているだろうし、もう下手なことはいはず。

「残るは領主と、何とかというエロオヤジですね。大丈夫です。私達が必ずお守りいたします。これの前の持ち主が、手を回してくれるでしょう」

私は自分の階級章を指し示した。

「持ち主……お、王子様っ!？」

エリネ様が驚愕する。

「ええ。王子様です。美男子で名高い、第四王子のギルネスト殿下です。目が合うと妊娠すると言われてるぐらい、見た目はいい男ですよ」

女性達は顔を見合わせて、きゃあきゃあ騒ぐ。

「あの方は女子供にだけは親切なので、間違ひなく適切に処理して下さい。ですから、エリネ様が不安に思われることは、何一つありません」

エリネ様は混乱しているのか、視線が定まっていない。

「大丈夫です。私はエリネ様の騎士です。あなたの不安は、全て私が解消いたします。何か困っていることがあったら、遠慮無くご相談ください。私はエリネ様に心穏やかにお過ごしいただくために、ここまで来たのです」

この状況で『心穏やか』に過ごせる人がいたら、それはよっぽどの大物か、騎士に守られ慣れている良家の令嬢だけだろうけど。

加えて王子様まで来ると聞いてしまえば、いい意味で心穏やかには過ごせないだろう。不安に思いながら過ごすよりは、大きな期待を胸に抱いていた方が、よほど身体にはいいはずだ。

第二話 激動の日

部屋のドアが開き、私は目を開けた。
 ドアの脇に座っていた私は、ゆっくり立ち上がって部屋の主であるエリネ様に微笑んだ。

「おはようございます」

爽やかな朝の、爽やかな挨拶。

エリネ様はしばし私の顔をぼーっと見つめた後、はたと気づいてきよろきよろと周りを見回す。

「ル、ルゼ様……………まさか、ずっとここにっ!？」

もちろん。昨夜からこうしてエリネ様のおうちにお邪魔して警護をしている。

「申し訳ありません。万が一のことがあってはいけないので、離れることが出来なかったのです。ご不快でしょうが、どうかお許し下さい」

「ふ、不快とかじゃなくて、こんな所でこんな風に一晩いたら、疲れちゃいますよっ!」

「大丈夫です、慣れていきますから。私は昔から魔物狩りのために、野宿もたくさんしてきました。寝られない場所もありますし、寝ていてもこのように気配で目を覚まします」
 エリネ様が呆然と私を見上げている。昨日のことは夢だとも思っていたのかもしれない。

「エリネ様、顔を洗いに行きませんか」

「え……………は、はいっ」

エリネ様に目を覚ましてもらうために外に出ると、私は爽やかな朝の空気を胸一杯に吸い込んだ。日はまだ昇り切っていないので、辺りは薄暗い。井戸の周りには女性達がいる、その中にはエリネ様のお母様、ルイカさんの姿もあった。農村の朝は早いな!

「あ、お母ちゃん、おはよう」

「ルイカさん、おはようございます」

ルイカさんは、近所のご婦人とおしゃべりを中断して会釈をした。

「ルイカさん、水を運ぶんですね。私が運びましょう」

「そんな、悪いですよ。ルゼ様はお疲れでしょう」

「大丈夫です。これぐらいのことで疲れるような鍛え方はしていませんから」

私が水桶を手にした時、横から伸びた手がそれを持ち上げた。

「自分が持ちましょう」

そう言ったのは、帯剣した大柄な平服の男性だった。彼は昨日到着した火矢ひやの会の會員だ。

「ありがとうございます。他の方は？」

「外を見回っているから、休んでいてくれ。疲れただろう」

「まさか。皆さんの方がお疲れでは？ 夜中に団体さんが来てましたが、皆さんが対処して下さったんでしよう」

私ににんまり笑って尋ねると、彼は呆れたように肩をすくめた。

「気づいたのか、さすがだな。盗賊とうぞくが出てな」

「あらまあ。盗賊とは、ずいぶんと行動が早いですねえ」

本物の盗賊なのか、あらかじめ用意されていた連中なのかは知らないが、こんな時に襲撃する目的など一つしかない。

奴ら私が一人で童を使つて乗り込んできたから、護衛として遣わされたのは私一人と勘違いしてしまったのだろう。こちら側には青盾せいじゆの連中もいるけれど、内情や警備体制が分かっているれば、詰め所を先に攻め落とすことも容易だし、騎士達の他は素人ばかりだ。それでどうにかなると思つたに違いない。

「今取り調べしているが、酒場でこの村にお宝があると吹き込まれたようだ」

「そうですか。どこのどなたか知りませんが、本当に古典的な手を」

これが何とかという貴族の仕業だとして、エリネ様に何かあったらどうするつもりだったのだろうか？ もしや下手に生かして公おみやげになつたら身の破滅だとも思つたのだろうか。それに、手に入らないならいっそ壊してしまえというのもあったかもしれない。

「ルゼさんは、エリネ様とゆつくりお過ごし下さい」

「いえ、私をその連中と会わせて下さい」

「女性には……」

「エリネ様、私は少し様子を見てきますので、ご両親と一緒にお待ち下さい」

私は彼の拒絶を無視してエリネ様に断りを入れた。

盗賊など締め上げたところで、首謀者には繋がらないだろう。それでも確認しておきたいことがあるのだ。

身支度を整えると、私達は村の講堂に案内された。

そこには叩きのめされ、ぼこぼこにされた盗賊達がいた。その中で、一番それらしい男の前に立つ。おそらくこれがこの盗賊団の首領だ。

私は少し考えてから、そいつの口に小さな砂糖菓子を含ませ、吐き出さないようにしばらく口を押さえる。何の変哲もない砂糖菓子だから身体に害はないが、このように意味深に使えば、見ている人は勝手に色々想像してくれる。

「質問する。素直に答えないと、後悔することになるから素直に答えろ」

ゆっくりと手を離すと、男は困惑したように私を見上げて口を開いた。

「だから、この村にお宝があるって聞いたんだよ！」

「誰に？」

「酒場でたまたま会った奴だから名前も知らねえよ」

「本当に？」

「そうだって言ってるんだろ！」

盗賊とはいえ、この村に關してはまだ何もしていない。余罪が見つからなければ、死刑にはならないかもしれない。このまま乗り切れればの話だが。

私は男の頭に手を置いた。

「本当は何をするつもりだった」

傀儡術で、頭の中にも同時に呼びかける。

「本当は何をするつもりだったか、よく思い出せ」

立ち読みサンプルはここまで

頭の中をかき混ぜるように干渉する。こうすると意識が混濁し、情報をよく吐いてくれるのだ。魔物達でさんざん試したから、加減を間違えなければ精神が壊れることもない。「金髪の女を……連れてくるように……それ以外は誰一人として生かさず……若い女は判別できないように……かみとかおを……もやしてしまえ……」

皆、息を呑んだ。

村一つ壊滅させようとは、大胆なことだ。こいつらを捕らえた火矢の会の人達も、その非道な内容に顔を歪ませる。

「どこで引き渡す予定だったの」

「連絡待……ち……」

そこまで言って男は白目をむいて気を失った。

「じ、自白剤か？」

火矢の会の人々が、恐る恐るといった感じで尋ねてきた。

「一時的に気を失っただけで、起きたらしばらく混乱するかもしれませんが大丈夫です」
どんな自白剤か追及されないうちに、私はさらに続ける。

「一つ分かったことがあります」

「分かったこと？」